Fusyo Collaboration letter

2 月 12 日　　No.36　　文責　廣田　秀俊

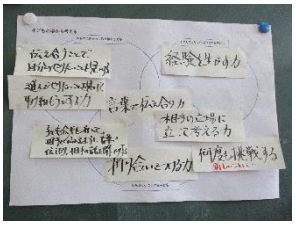
架け橋期の教育の充実に向けて

大分県教育庁 幼児教育センター 幼児教育スーパーバイザー の武津智美先生をお迎えして、附属幼稚園と附属小学校で合同研修を行いました。

幼児教育と小学校教育の学びをつなぐため、幼稚園と小学校の連携は欠かすことのできないものです。その連携が形式的なものにとどまっていないかを改めて考えていく機会として、今回の研修会を実施しました。

幼保小の架け橋期は、0～18 歳の学びの連続性に配慮しつつ、5 歳児から小学校 1 年生の 2 年間を対象にした時期を指します。その対象の時期に、子供にかかわる大人が、すべての子供に学びや生活の基盤を育めるように、幼保小の架け橋期のプログラムを組んでいきます。

本校園の期待する子ども像は、“自主的主体的に課題解決する子供”を目指しています。その具体的な姿として、【自分で選ぶ・考える・決める】【めあてをもって取り組む】等の自主的な姿があります。幼小合同研修により、教職員同士が互いに語り合い、考え合い、学び合うことでそれぞれの教育の理解を深めていきました。



年長児と小学校 1 年生の 2 年間の架け橋期の時期に、それぞれの時期にふさわしい教育を連続性のあるカリキュラムへと編成していく必要があります。実際の子供の姿から育ちや学びを考えていくため、事前に小学校教職員が幼稚園児の遊びの様子を見取り、その事柄について意見を交流していきました。

「一人の園児のつぶやきを周りの園児が受け入れていた」「トラブルが起きたときに教職員が子供に判断させる機会を設けていた」「「困ったときに『どうする？』と聞くのは幼小同じ」「教職員が遊びの環境をその場で整えていた」「先生が指示を出さなくても片付けをはじめる自立心が見られた」「自分のふり返りを言い、友だちのふり返りを聞き、先生の言葉を聞いてその事柄に反応していた」等、様々な様子を小学校から伝え、幼稚園からは園児への支援等の関わりについての話を聞くことができました。

小学校以降へとつながる資質・能力を育てるため、話し合いのグループで期待する子供像を再度考えていきました。「折り合いをつける力」「何度も試行錯誤する力」「課題を解決する力」「何度も挑戦する力」「きまりを守って友だちと協力して楽しむ姿」など、このような姿に子供が育っているかを考え、幼小をつなげていく教育を継続することを再認識しました。